生活体験を基軸とする親子キャンプの効果： 子どもを見まもり育てるコミュニティづくりを目指して

菊田 文夫¹ 米田 朝香²

Living experience of camping in parents and children : creating a community where all adults protect and raise all children

Fumio Kikuta¹ and Asaka Yoneda²

abstract

This study aimed to explore whether the living experience of parent-child camping would be able to create a basis where all adults would watch over and raise all children, and what contribution the camping experience would make in relation to child-raising support. Questionnaire responses from parents who participated in a camp suggest that sharing the living experience through camping and living in large-sized family groups may be expected to create support systems for helping children beyond one's own immediate family environment. Questionnaire responses on realizations or opinions of discoveries made through participation were arranged into the following categories : "I learned about group lifestyles by interacting with others," "Others cared for me or were nice to me," and "Camp became a place where I could feel safe." Parent-child camping experiences can play a large role in creating a great opportunity to facilitate inter-generational interactions outside one's own family, as well as developing strategies to create a community where all adults watch over and communally raise all children. Furthermore, how participants wanted their family to live during the parent-child camping experience was arranged into the following categories : "I want to create opportunities for collaborating with others outside the family in daily life," "I want to create opportunities for interacting with others of different ages, outside of the family", "I want to be involved in the development of the children of other families." Compared to before camping, the "emotional scolding" item in the nurturing skill scale on the questionnaire was significantly decreased after camping. Changes in parents' behaviors that may occur as a result of the camping experience may contribute to a reduction in aggressive behaviors in children.

Key words : parent-child camping, living experience, child-raising support, community creation

親子キャンプ, 生活体験, 子育て支援, コミュニティづくり

I 緒 言

近年、特に都市部においては核家族化が進み、子育てに不安を感じる母親が多くみられるように

なってきた。NPO 法人子育て学協会（2014）が行った 6 歳以下の未就学児童を子に持つ母親を対象とする調査によると、「いろいろ心配事がある」への回答が 58.6%、「子育てに自信が持てない」

¹ 聖路加国際大学看護学研究科基盤領域（健康教育）

² 東海大学文学部

¹ St. Luke's International University Social Sciences & Humanities/Fundamental of Research（Health Education）

² Tokai University School of Letters

表 1 親子キャンプへの参加家族数、ならびに参加者の年齢構成

実施年	参加家族数 (家族)	大人 (名)	子ども(名)			子どもの合計 (名)
			～5歳 (幼児)	6歳～8歳 (小学校低学年)	9歳～11歳 (小学校高学年)	
2009	5	8	2	2	4	8
2010	7	11	5	3	4	12
2011	8	9	2	6	2	10
2012	15	17	2	10	5	17
2013	10	16	8	7	1	16
2014	15	18	6	9	5	20
2015	13	16	4	10	1	15
計	73	95	29	47	22	98

への回答が48.4%みられる。現代はインターネットなどを通じて、自らが必要とする情報を容易に手に入れることができる便利な環境にあるにもかかわらず、育児不安が多く母親にみられるという現状がある。

上野ほか(2010)が述べているように、受験戦争が激しくなった1980年代には、自分の子どもが落ちこぼれることなく、立派に成長できるよう子育てをしなくてはならないという母親の役割意識が高まり、育児に自信が持てなくなる母親が増加した。これに核家族化や近所づきあいの希薄化などで、育児について相談する相手を身近に求めることができず、その結果として、育児の知識を育児書に求める、育児のマニュアル化傾向を指摘している。三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2014)の調査によると、子育てについて相談する相手として、70%以上の母親が、第1位に「配偶者やパートナー」、第2位に「自分の母」をあげている。2002年に行われた同様の調査で第3位にあげられていた「近所の知人」は、2014年の調査によると第8位に後退しており、その割合も47.1%から20.0%へと減少している。さらに、「子育ての悩みを相談できる人がいる」と回答している母親が2002年には73.8%みられたのに対して、2014年には43.8%と激減している。これらの結果から、現在、子育て中の母親は、その不安や悩みを解決するために、居住する地域の資源を活用せず、家族内で解決しようと努めていることが示唆される。その一方で、日本労働組合総連合会(2013)の調査によると、20歳以上の男女3000名のうち、「子育ては社会全体でするもの

と思う」に肯定的な回答を与えたものの割合は、20歳代で28.2%、30歳代で27.9%とみられており、若い世代が自らの子育てについて、社会の支援を少なからず期待していることがわかる。

このような現代の子育て事情を鑑み、S大学健康教育学研究室では、大人皆で子どもを見まもり育てるコミュニティづくりを目的として、子どもとその保護者が生活体験をともにする夏期親子キャンプを2009年から継続して実施している。

本研究では、これらのキャンプが都会で生活する家族の交流を促すことによって、大人皆で子どもを見まもり育てる雰囲気の醸成を始めとする、このキャンプの目的を達成することができたのか、さらに、子育て支援に関してどのような貢献を果たすことができたのか、について明らかにすることを目的とする。

II 方 法

1. 研究対象

本研究では、2009年から2015年の毎年8月に静岡県伊東市の公立施設において、幼稚園児、あるいは小学生の子どもを持つ家族を対象に2泊3日で実施した7回の親子キャンプの効果について検証した。本研究の対象は、これらのキャンプに参加した65家族の母親である。なお、これらのキャンプへの参加家族数、ならびに参加者の年齢構成は表1に示す通りである。

2. 募集の方法と指導体制

親子キャンプの参加者募集については、キャン

プの約1カ月前までに、東京都中央区立の小学校に募集パンフレットの全校配布を依頼することによって行った。

また、これらのキャンプの指導にあたっては、大学教員1名と看護師複数名に加えて、看護学部学生複数名を含む、10名程度がスタッフとして関わる体制をとった。さらに、海遊びのアクティビティに関する安全確保のため、ライフセーバーの有資格者1名が毎回、必ずスタッフとして参加することとした。

3. 親子キャンプの目的と活動内容

本研究の対象とした親子キャンプでは、自然豊かな環境を活用しながら、魅力的な自然体験や冒険体験、世代間交流を含む生活が体験できるプログラムづくりを目指してきた。これらの特徴は次の6点である。

- 1) 自然とふれあうアクティビティを通して、いのちを感じる。
- 2) 「このひととき」を大切に想い、ていねいに時を過ごす生活を体験する。
- 3) すべてのアクティビティに、親子（家族）が全員で参加する。
- 4) 大人皆で子どもを見まもる、まるで大家族のような生活を営む。
- 5) 親の気づきを、今後の日常生活にどのように活かしていくか、について考える機会を得る。
- 6) 居心地の良い常にオープンな雰囲気をつくる。

なお、このキャンプの目的は、次の7点である。

- ①さまざまな体験を通して、子どもの成長を実感し、子どもの新たな面を発見する機会を得る。
- ②喜びや感動体験を共有する。
- ③自らの子育てについての気づきを得る。
- ④互いに感謝の気持ちを伝え合う。
- ⑤他の家族と集団生活を送るなかで子どもたちを見まもり育てる雰囲気づくり。
- ⑥自然体験活動を通して、「自然」や「いのち」の大切さを感じる。
- ⑦参加者が親子キャンプで体験・発見したことを、自らの日常生活に活かそうとする動機づけを促す。

さらに、本研究の対象とした7回の親子キャン

プに共通するアクティビティが、上記①から⑦にあげた目的の何れに関係するものかについては、表2に示す。

それぞれのアクティビティと、これら7つの目的との関係は次の通りである。

・アイスブレイキング

このキャンプで初めて出会う、さまざまな年代の家族以外の参加者全員と最初に交流する場となる。そのため、自分の子どもと家族以外の参加者との関わりについて親が最初に観察できる場となるため、目的①に関係するアクティビティとして捉えることができる。さらに、これらのキャンプに参加した大人皆で子どもたちを見まもる雰囲気づくりの契機として、目的⑤に関係するアクティビティである。具体的には、「ネームトス」、「ラインナップ」、「木こりとリス」など、野外活動において互いを知り合うためのアイスブレイキングでしばしば活用されるゲームを行った。

・アウトドアクッキング

大人も子どもも、自分にできる役割について責任を持って担い、他者と協働して料理をつくりあげる過程と、参加者皆で楽しく食卓を囲む食事の時間を親子で体験できる。目的①、目的②、目的④、目的⑤に関係するアクティビティである。さらに、協働作業の過程において生まれる親同士の交流は目的③に、また、子どもに対する大人の声かけや、子どもが自発的にお手伝いする姿を観察し、自らの子育てへの気づきを得る場として目的⑦に関係するアクティビティである。参加者が火おこしや調理作業を協働し、「ブイヤベース」、「パエリア」、「クラムチャウダー」などの鍋料理を主とするメニューに挑戦し、参加者およびスタッフ全員で食卓を囲んだ。

・絵本の読み聞かせ

生きることやいのちの尊厳について描かれた絵本を、子どもたちに読み聞かせる。就寝前のひとときに、参加者全員で時間と場所を共有するため、大家族のような雰囲気づくりを意図した目的⑤に関係するアクティビティである。スーザン・バーレイ「わすれられない おくりもの」、ハンス・ウィルヘルム「ずーっと ずっと だいすきだよ」などの絵本を読み聞かせた。

表2 親子キャンプのプログラム

	第1日	第2日	第3日
午 前		ラジオ体操 朝食（給食） 海遊び①②⑤⑥ （伊東市の宇佐美海岸で海水浴と磯遊びを楽しむ活動）	ラジオ体操 朝食（給食） つくって遊ぼう①②⑥ （自然の素材を使って、笛や空気鉄砲、竹トンボをつくって遊ぶ活動）
午 後	オープニング オリエンテーション アイスプレイング①⑤ （体を動かすゲームを楽しみながら、家族を超えて子どもと大人が親しくなるための活動） アウトドアクッキング ①②③④⑤⑦ （火おこしと食材の調理に子どもと大人が協力して取り組む活動） 夕食（自炊）	昼食（給食；流しそうめん） フリータイム おやつ時間（スイカ割り） 夕食（給食）	昼食（給食） ふり返しシートへの記入 ふり返し・分かちあいの会 ②④⑤⑦ （親子キャンプに参加して、それぞれの家族が新たに発見したこと、感じたことを皆で共有する活動/心の引き出しのラブレターの配達） スライドショー ②④⑤⑦ （親子キャンプで撮影した写真をスライドショーとして スタッフからのメッセージを伝える活動） 解散
夕食後	絵本の読み聞かせ⑤ （生きること、いのちの尊厳について描かれた絵本を紹介する活動）	心の引き出しのラブレター ①②④⑦ （参加者とスタッフ、それぞれが、メッセージを贈りたい 相手に手紙を書く活動） ロマンチックキャンドルナイト ①②④⑦ （参加者とスタッフが、ひとりひとつずつのキャンドルを手にしながら、2日間の想いを語り、これらを皆で分かちあう活動）	

それぞれのアクティビティに付記された番号は、親子キャンプの目的①から⑦との関連を示すものである。

・海遊び

自然体験活動を通して新たな体験や感動、さまざまな年代の参加者との交流が期待できる、目的①、目的②、目的⑥に関係するアクティビティである。さらに、大人皆で海で遊ぶ子どもたちの安全を見まもる雰囲気が自然に醸成されるため、目的⑤にも関係するアクティビティである。

・心の引き出しのラブレター

参加者とスタッフ、それぞれが、嬉しかったこ

と、楽しかったこと、感謝の気持ちなどを伝えたい相手にメッセージカードを贈る、目的②と目的④に関係するアクティビティである。また、子どもからメッセージを受け取った大人が、子どもの成長を感じる契機として、目的①と目的⑦に関係するアクティビティである。

・ロマンチックキャンドルナイト

参加者とスタッフ全員が、ひとりひとつずつキャンドルを手にしながら、このキャンプで感じ

た想いについて参加者全員が語り、これらを皆で分かちあう、目的①、目的②、目的④、目的⑦に関係するアクティビティである。

・つくって遊ぶ

自然の素材を使ったおもちゃづくりと昔の遊びを、親子で共に体験する活動は、目的①、目的②、目的⑥に関係するアクティビティである。元公立中学校長の指導のもと、空気鉄砲、竹とんぼ、紙の吹き矢を親子が協働して制作し、それらを用いた遊びを体験するアクティビティである。

・ふり返り・分かちあいの会

親子キャンプに参加して感じた想いや新たに発見したことなどについて、家族ごとに話し合い、これらに参加者全員で分かちあう活動は、目的②、目的④、目的⑤、目的⑦に関係するアクティビティである。

・スライドショー

スタッフから参加者に向けて、親子キャンプのふり返り、感謝の気持ちを伝えるスライドショーは、目的②、目的④、目的⑤、目的⑦に関係するアクティビティである。

なお、アウトドアクッキングを行う1日目の夕食以外の食事については、宿泊した施設に給食を依頼した。また、フリータイムは、参加者が自由に過ごす時間として位置づけ、スタッフは積極的に関わらなかった。

4. 調査内容

本研究においては、次の2点に関する無記名の質問紙調査を行った。

(1) 2009年から2015年の親子キャンプについては、何れも最終日に、質問1「親子キャンプに参加して、どのような発見や気づきがあったか」、質問2「親子キャンプで家族以外の人びととふれ合う機会を得て、感じたこと気づいたこと」、質問3「親子キャンプで体験したことを、今後、家族の日常生活（生きかた）にどのように活かしていきたいと考えているのか」、に対する回答を自由記述形式で求めた。

(2) 2015年の親子キャンプでは、キャンプ前後で母親の養育スキルに変化が見られるか否かを確認するため、第1日目のオープニング（キャンプ開始前）と、第3日目のクロージング（キャンプ

終了時）に、三鈷（2008）が開発した養育スキル尺度を用いた測定を行った。この尺度は、「誘導的しつけ」、「感情的叱責」、「注目・関与」、「スパンキング」、「物的報酬」、「援助的コミュニケーション」、「きげんとり」、「不適切行動の無視」、「身体的攻撃」の下位尺度から構成されており、それぞれの下位尺度に含まれる質問項目は4件法による回答を求めるものである。

5. 分析方法

調査内容(1)については、「ふり返りシート」に自由記述で回答のあった文章を、ひとつひとつの文に分割したうえで、質問の回答として不適切なものは分析の対象から除いた。なお、本研究では、「文」を、複数の単語で構成された、ひとつのまとまった内容を表現しているもので、「。」(句点)で終わっているもの、また「文章」を、複数の文から構成された、何らかの意見を表現しているものと定義して文章を文に分割した。その後、質問1と質問2の回答を、これらのキャンプに参加して得た発見や気づきという視点から、また、質問3の回答を、家族の今後の日常生活（生きかた）に活かしていきたいことがらという視点から、それぞれKJ法を用いて分類した。これらの結果に基づいて、親子キャンプの目的が達成されているかどうかについて評価した。

また、調査内容(2)については、養育スキル尺度を構成している9つの下位尺度それぞれの得点について、キャンプ前後で有意な差が認められるか否かを確認するため、Wilcoxonの符号付き順位和検定を行った。なお、統計解析には、IBM SPSS Statistics 23を用いた。

6. 倫理的配慮

親子キャンプへの参加申込書において本研究に関する説明を行い、これに対する同意を得た。また、母親を対象とした質問紙調査の実施にあたっては、個人や家族が特定できないように、質問紙の内容および回収方法について配慮した。

Ⅲ 結 果

調査内容(1)については、2009年から2015年

の親子キャンプに参加があった73家族のうち、65家族の母親からの回答を得た。また、調査内容(2)については、2015年の親子キャンプに参加があった10家族のうち、9家族の母親からの回答を得た。

1. 親子キャンプに参加して得た発見や気づきについて

「ふり返しシート」の質問1と質問2に対して自由記述形式で回答された文章を文に分割したところ176の文を得た。これらについて分類した結果を表3に示す。

これによると、親子キャンプに参加して得た発見や気づきについては13のカテゴリーに分類することができた。「子どもの成長を確認・実感できた」に分類できた文が45と最も多く、次いで「普段の生活では見えない子どもの姿を見ることができた」が39、「親自身の生活や子育て観をふり返る機会になった」が21、「他者との関わりを通して、集団生活について学ぶことができた」と「自分の子育てについての課題が発見できた」が16あった。一方、少数ながら、「いのちや生きる営みの大切さを感じた」が8、「自然とふれ合う大切さを感じた」と「みんなで大家族になれた」がともに7、「子どものさらなる成長への期待や希望を感じた」と「他者から気にかけてもらったり、優しさにふれることができた」がともに5、「子どもの素晴らしい力を感じた」と「子どもが安心できる居場所になった」に分類できたものがともに3、「親になれた喜びを感じた」が1あった。

2. 家族の今後の日常生活（生きかた）に活かしていきたいことから

「ふり返しシート」の質問3に対して自由記述形式で回答された文章を文に分割したところ84の文を得た。これらについて分類した結果を表4に示す。これによると、家族の今後の日常生活に活かしていきたいことからについては13のカテゴリーに分類することができた。「子どもを少し離れた距離から見まもりたい」に分類できた文が16と最も多く、次いで「異なる年齢の家族以外の他者と接する機会をつくりたい」が10、「今後の生活でも家族以外の他者と協働できる機会をつく

りたい」、「今後の子どもの成長に期待したい」、「子どもにできる役割を任せたい」に分類できた文が、それぞれ9あった。さらに、「子どもが自立した人間に成長できるように支援したい」が8、「自然とふれ合う機会をつくりたい」が7、と「子どもと関わる時間や機会を増やしたい」が6、「子どもにポジティブフィードバックを心がけたい」が5、「ゆっくりとした時間を過ごしていきたい」が4、「親子キャンプで得たつながりを糧に、子育てをがんばっていきたい」、「これからも子どもにたくさんの体験をさせたい」、「他の家族の子どもの成長にも関わっていききたい」が、それぞれ3あった。

3. 親子キャンプ前後の養育スキル尺度得点の差について

表5に示すとおり、養育スキル尺度を構成している7つの下位尺度得点のうち、「感情的叱責」については、キャンプ前に比べてキャンプ後の得点が有意に低下している($p=0.018$)ことがわかった。しかしながら、その他の下位尺度については、キャンプの前後で有意な差は認められなかった。また、「身体的攻撃」については、この尺度を構成する質問項目すべてに回答している母親が9名中3名であったため、分析から除外した。

IV 考 察

1. 親子キャンプに参加して得た発見や気づきについて

表3に示すように「子どもの成長を確認・実感できた」と「普段の生活では見えない子どもの姿を見ることができた」のカテゴリーに含まれる文は、2009年から2015年までのすべての実施年において回答がみられることから、このキャンプの目的①、すなわちこれらのキャンプを体験することによって、子どもの成長を実感でき、子どもの新たな面を発見できたと考えられる。

朴・杉村(2009)は、子育てに関する省察について3つの階層と3つの領域から構成されるモデルを仮定し、親自身に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察それぞれを測定する尺度の構成を試みている。これによると、3~5歳児の子どもを育てる親について、子育てにおける

表 3 親子キャンプに参加して得た発見や気づき

分類したカテゴリーそれぞれに含まれる文の例と文の数	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	合計
子どもの成長を確認・実感できた	1	2	4	8	7	15	8	45
・他のご家族と一緒に過ごす中で、同じ年齢のお子さんを見て、自分のことは自分であるということがとても成長したと思った。								
・一度も私（母親）に甘えてこなかった。心も体も成長したようだ。								
・自分の子どもだけではなく、他の子どもたちの成長も見ることができて楽しく思う。								
普段の生活では見えない子どもの姿を見ることができた	2	10	6	5	2	9	5	39
・興味あることに集中している娘を見て驚いた。								
・普段の生活では気づかない（or 見せない）子どもの姿だった。あまりに楽しそうなので、東京に戻ってマンション暮らしに戻れるか心配になるくらいだ。								
・家庭ではあまり見せない一面を見ることができた。（リーダーシップ、他人とのコミュニケーション、下級生の面倒をみるなど）								
親自身の生活や子育て観をふり返る機会になった	1	1	2	6	4	6	1	21
・どの家族も大切な子どものために頑張っていると思う。方法はいろいろだけれど向かうところは一つなんじゃないかと思った。								
・他の家族の人と一緒に生活することは、子どもだけではなく、大人も自分たちの生活を見直す意味で、大変有意義であったと思う。								
・子どもと自分との関係を、他のお母さんたちから見て、話してもらえたことが良かった。								
他者との関わりを通して、集団生活について学ぶことができた	1	2	2	5	1	4	1	16
・普段はこんなに多い人数で食事をしたり、大部屋でみんなと一緒に寝たり、何をするにも団体行動で、人を待ったり、待たれたり、人に譲ったり、譲られたり、経験ができなかったことが自然に学べた気がする。								
・団体生活の中で、子ども心にも役割分担の大切さを気づかせてくれたスタッフに感謝。								
・大家族のような生活に、共に子どもをほめ、しかる、自然な生活ができた。								
自分の子育てについての課題が発見できた	2	2	1	2	3	3	3	16
・他の家族の皆さまの様子を見ていても、子どもに介入する親御さんより、子どもを信頼し任せる親御さんの方に好感が持てるし、お子さまもしっかりしているように感じた。								
・子どもと一緒に体験し、一緒に感じてあげることの大切さに気づいた。								
・これからも、集団生活をしていく中で、自分のやるべきことを考えさせたいと思う。								
いのちや生きる営みの大切さを感じた	1	3	2	0	0	2	0	8
・「いのち」があるとは、「つながり」を感じるのだと思う。多くのつながりが得られて、いのちのチャンネルが増えたと思う。								
・今ここにいる、すぐ目の前の人、隣の人のいのちを大切にすることが、自分にとって何よりのこと、と感じた。								
・お年を召した方から0歳児まで（の参加者を見て）、いのちが引き継がれていることを実感した。								
自然とふれ合う大切さを感じた	1	6	0	0	0	0	0	7
・本物に、自然に触れさせることの大切さ。								
・たくさんの生物がいて、自分がいて、このような場所にいることが自然であり、都会にいたことが不自然ということに気づかされた。								
・子どもが簡単に接することのできるいのちにあふれ、子どもの成長にプラスになる環境だった。								
みんなで大家族になれた	2	2	0	2	0	1	0	7
・大家族っていいな、と思った。皆さんと仲良くできて、とても楽しかった。								
・私（母親）も子どもも、今回本当に大きな家族の一員になれたような気がして、すてきな時間が過ごせた。								
・夜、星の下でキャンドルを囲んでのお話会、知らない家族がこんなに一日で親しくなれるとはマジックのような企画だった。								
子どものさらなる成長への期待や希望を感じた	0	1	0	4	0	0	0	5
・同年齢のお子さんとは意気投合できたようなので、場数を踏んで初対面の子どもや親御さんと話ができるようになったらいいなと思う。								
・同年代の子どもとのふれあいをさらに深め、またお兄さんお姉さんとの交流の機会を通じ、子どもに成長してもらいたい。								
・子どもも大人になってパパになったら、気の利く男になって欲しい。								
他者から氣にかけてもらったり、優しさにふれることができた	2	0	0	2	0	1	0	5
・皆の笑顔で幸せになった。								
・子どもは最年少だし、ついていけないことも多々あった。そのなかでみんなが温かい目で見まもってくださり、一緒に遊んでくれて、本当に良かったと思う。								
・皆さんの優しさにつながっている子どもの表情は大変輝いていた。								
子どもの持つ素晴らしい力を感じた	1	1	0	0	1	0	0	3
・子どもはホントにすぐにだれとでも仲良くなってしまうからスゴイ！								
・子どもは子ども同士ですぐに仲良くなれる。子どもの力はすばらしいと思った。								
・全く見たことのない、知らない人と共同生活することを嫌がらずにできたことがスゴイ！と思った。								
子どもが安心できる居場所になった	0	1	0	0	1	1	0	3
・子どもも私（母親）の顔をうかがうこともなくなり、のびのびとして過ごしていた。								
・このキャンプが安心でき、楽しいところだと感じた証拠だと思う。								
・子どもは、見守られた安全な環境にいるから、のびのびと幸せに成長していける（ことに気づいた）。								
親になれたことの喜びを感じた	0	1	0	0	0	0	0	1
・娘が産まれてきてくれて、お母さんになることができて、親子になって、親子キャンプにも参加することができて、とても嬉しかった。								

表 4 家族の今後の日常生活（生きかた）に活かしていきたいことがら

分類したカテゴリーそれぞれに含まれる文の例と文の数	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年	合計
子どもを少し離れた距離から見まもりたい	0	3	1	4	2	3	3	16
・キャンプで他のお子さんたちに接したように、少し間をおいて、見守れるようにしたい。								
・私（母親）も言うことはばかりではなく、子どもの考える時間を待てるように心がけていきたい。								
・子どもがチャレンジする姿を、たとえ失敗しそうなときでも、手を貸さずに見守ってみようと思う。								
異なる年齢の家族以外の他者と接する機会をつくりたい	0	1	3	3	0	2	1	10
・同年齢のお子さんとは意気投合できたようなので、場数を踏んで初対面の子どもや親御さんと話ができるようになったらいいなと思う。								
・異なる年齢の子どもたちが参加するようなプログラム等にもまた参加させてみたいと思った。								
・大人も子どもも混ざっての団体生活というのは、子どもにとっても意味がある。子どもは皆で育てることが、子どもの多様性を育むのだと思う。								
今後の生活でも家族以外の他者と協働できる機会をつくりたい	1	0	2	2	1	3	0	9
・知らない方との協力する姿勢を今後も育てていければと思う。								
・優しい気持ちでお互いに協力し合い、幸せに生きていける社会づくりに貢献したいと思う。								
・いつもの知っている人だけでなく、いろいろな人と出会って話をしたり、一緒に遊んだりすることも楽しいのだということを忘れずに、これからもたくさんの人と出会えるように努力していきたい。								
今後の子どもの成長に期待したい	0	2	0	4	0	3	0	9
・子どもが少しずつ成長するように、今回のようなプログラムの機会があれば、どんどん参加して、団体行動や思いやりを持てる子どもになってくれることを期待している。								
・今まではお世話してもらった側が多かったが、これからは、お姉さんの意識をもって、お世話する側になっていって欲しい。								
・自分以外の人のことをもっと思いやれる、もっと考えられるようになってほしいなあと、日々の生活でも少しずつ親子で話していきたい。								
子どもにできる役割を任せたい	0	1	1	2	2	2	1	9
・子どもに関しては、少しずつお手伝いをやらせていこうと思う。								
・みんなと仲良く助け合うこと、その助け合いに子どもでもできることは少しでもやり、力になれるように、日々の生活でも教えていきたいと思う。								
・お手伝いをしてもらった時、ひと通りのやり方を教えたら、任せてやらしてもらおうと思った。								
子どもが自律した人間に成長できるように支援したい	1	0	0	3	1	3	0	8
・自分の発言、行動に責任をもって生活をさせていく。								
・子どものコミュニティに信頼して入れる。（囲い込まない）								
・人が困っていたり、色々な場面で、親に言われなくても子ども自身が考えて、行動できるようにしていきたい。								
自然とふれ合う機会をつくりたい	1	1	0	1	1	2	1	7
・まずは、自然とつながること、を家族で実践していく。								
・これから時間をつくって自然を楽しむ機会を年間を通じて作っていきたい。								
・都会の生活では忘れがちな、自然の恵みに感謝する心をときどき思い出したいと思う。								
子どもに関わる時間や機会を増やしたい	1	1	1	0	2	1	0	6
・いつも忙しいという理由で、子どもと接する時間が取れなかったりすることがあるので、もっと接する時間をたくさんつくってきたい。								
・初めての体験が今後一緒にどのくらいできるだろう？ たくさん同じ時間を過ごしたいと思った。								
・親子で、または友だち同士と一緒に何かが作るチャンスをもっと増やしてほしいなと思う。								
子どもにポジティブフィードバックを心がけたい	0	2	2	0	1	0	0	5
・親というのはその欠点を減点するのではなく、大切な課題として良い方に導くのが仕事。								
・子どもの良いところ悪いところがよくわかったので、これからは厳しくも温かい教育を心がけたい。								
・子どもの長所、できることに目線に向けてほめるようにしようと思った。								
ゆっくりとした時間を過ごしていきたい	0	0	1	1	1	1	0	4
・家に帰っても少し気持ちをゆっくりして、子どもたちと遊びたいと思う。								
・ゆっくり過ごすことの大切さをつくづく感じた。								
・のんびりすることの大切さ、協力することの大事さがわかった。								
親子キャンプで得たつながりを糧に、子育てをがんばっていききたい	1	0	0	2	0	0	0	3
・なかなか日常においては、親の世界は狭いもので、このキャンプの 3 日間ですぐ得られるようなつながりは多く得られない。今回のキャンプを通して得られたことを日常でも少しでも広げていきたいと思う。								
・いつもの知っている人だけでなく、いろいろな人と出会って話をしたり、一緒に遊んだりすることも楽しいのだということを忘れずに、これからもたくさんの人と出会えるように努力していきたい。								
・もし、新しいところで人付き合いがうまくいかなかったら、このキャンプのスタッフの方々のことを思い出して、「ステキな人間はいるんだ！」と信じて、がんばっていきこうと思う！								
これからも子どもにたくさん体験をさせたい	0	1	1	1	0	0	0	3
・親子そろって、多くのことを経験させてあげたいと思う。								
・家族でも、楽しい体験をできるだけさせてあげたいなあと考えた。								
・子どもたちにはできるだけ多く、このような色々な経験をさせてあげたいと思う。								
他の家族の子どもたちの成長にも関わっていききたい	0	0	2	0	0	0	1	3
・他の保護者の方々が、わが子ではない子どもたちの面倒も見られているのを見て、今回、私（母親）はわが子のことだけで手いっぱいだったが、もう少し手がからなくなってきたら、同様にわが子以外の子にも接することができたらな、と思った。								
・他の家族の子どもも育てるという意識を強く持っていきたいと思う。								

表5 親子キャンプ前後における養育スキル尺度得点の変化(2015年)

(n=9)

	キャンプ前	キャンプ後
(1) 誘導的しつけ	21.6±3.1	22.0±2.3 (p=0.596)
子どもが他者に悪いことをしたとき、その行動のせいで相手がイヤな気持ちになったことを子どもに伝える。 子どもが他者をイヤな気持ちにさせる行動をとったときに、相手の気持ちを考えるように子どもを促す。 子どもが他者にいじわるをしたとき、どれだけ相手が傷ついたか子どもに考えさせる。 子どもが他者と何かトラブルを起こしたとき、自分が相手の立場だったらどう思うか子どもに考えさせる。 子どもが他者に何か不適切な行動をしたときに、相手がどんな気持ちになるか子どもに考えさせる。 子どもが他者に危害を加えそうになったとき、その行動の結果、相手がどんな目にあうか言葉で伝える。		
(2) 感情的叱責	19.3±2.7	13.6±5.3 (p=0.018)
感情にまかせて子どもをしかる。 子どもが悪いことをしたとき、自分の気分によって叱る程度が変わる。 子どもが悪いことをすると、感情的に怒って言葉で責める。 子どもが何か失敗すると、きつくせめる。 子どもが言うことをきかないと、大声でどなりつける。 子どもを罰するときには、おどしをつかう。 「良い子にしていなさい」のように、あいまいな指示をついてしまう。 自分のきげんが悪いと、子どもが良いことをしてもほめない。		
(3) 注目・関与	18.6±2.7	19.3±3.4 (p=0.230)
どんなに忙しくても、子どもと話したり一緒に遊んだりする。 忙しくても、子どもの行動をしっかり見るようにしている。 どんなに疲れていても、子どもと一緒に運動したりゲームをしたりする。 何か家事をしていても、子どもの様子や状況をできるだけ把握するようにしている。 子どもが何をしているかよく見るようにしている。 子どものやっていることを注意深く見守っている。		
(4) スパニング	7.1±3.2	5.9±2.0 (p=0.102)
子どもが言うことをきかないと、子どもの手や足をびしゃりとたたく。 子どもが悪いことをすると、子どもの手や足をびしゃりとたたく。 子どもがどうしてもいうことをきかない時には、つい子どもの顔や頭をたたく。 子どもが触ってはいけない物を触ろうとした時、子どもの手や足をびしゃりとたたく。		
(5) 物的報酬	10.8±1.7	9.1±2.3 (p=0.196)
子どもが良いことをしたら、ごほうびをあげる。 子どもが嫌なことでもがんばっていたら、ごほうびを与える。 子どもが苦手なことに挑戦していたら、がんばったごほうびを与える。 子どもが良いことをしたら、好きなものを買ってあげる。		
(6) 援助的コミュニケーション	23.4±2.9	24.7±3.2 (p=0.288)
何が良かったのか子どもに伝えながらほめる。 子どもが困っているときには、良い解決策と一緒に探す。 子どもが困っているとき、言葉で励ます。 子どもの行動を禁止する際には、その行動が他者に与える迷惑を子どもに分かる言葉で伝える。 どんなに時間がなくても、子どもが良いことをしたらほめる。 子どもが悪いことをしたとき、理由を聞くようにしている。 すべきことを、わかりやすく子どもに伝える。		
(7) きげんとり	8.0±1.9	6.9±1.5 (p=0.244)
買い物をしているときに子どもが泣きさけぶと、つい好きなものを買ってあげる。 子どもの悪い行動に対して罰を与えると決めても、子どもが嫌がるやめめる。 子どもがかんしゃくをおこすと、すぐにきげんをとろうとする。 子どもに何かさせようとしても、子どもが嫌がると途中であきらめる。		
(8) 不適切行動の無視	7.2±1.3	7.1±1.9 (p=0.862)
子どもが泣きさけんで自分の要求を通そうとしても、相手にしない。 子どもがわがままを通そうとしてぐずっても取り合わない。 子どもが注意を引こうとしてめそめそ泣いても取り合わない。		
(9) 身体的攻撃		
感情的になると、つい子どもを押ししたり、突き飛ばしたりする。 怒った時に、つい子どもに物をなげつける。 怒りにまかせて、つい子どもをぶったり、蹴ったりする。		

関連要因と省察尺度との相関をみた結果、「一般的に自分の子育てをふり返り考え直すなど省察を行う親の子育てはうまくいっているという認識を部分的に確認することができた」と述べている。本研究において、「親自身の生活や子育て観をふり返る機会になった」のカテゴリーに含まれる文がすべての実施年においてみられることから、親子キャンプが親の子育てに関する省察の機会として期待できると考えられる。

「自分の子育てについての課題が発見できた」のカテゴリーに含まれる文は、すべての実施年において回答がみられており、これらの中には、子どもに介入する親に比べて子どもを信頼し任せる親に好感が持てるとともに、子どもがしっかりしているように感じられたという記述が複数みられた。大学生の親子関係、自尊感情、生き方志向が子ども時代の両親の養育態度とどのような関連がみられるのか、について検討した山下ほか(2010)の研究によると、「母親に保護されすぎていたよりも、ある程度自律を承認してもらっていた方が、自己に対して主体的に成長する姿勢を持つことができる」ことが明らかにされている。子どもを信頼し、子どもの主体性を尊重する子育てに価値を見いだす契機として、親子キャンプが果たすべき役割は大きいと考えられる。

このように、親子キャンプへの参加によって得られた発見、気づきとして、「親自身の生活や子育て観をふり返る機会になった」と「自分の子育てについての課題が発見できた」のカテゴリーに含まれる文が、すべての実施年においてみられることは、これらのキャンプの目的③、すなわち、自らの子育てについての気づきを得たことがうかがえる。

さらに「他者との関わりを通して、集団生活について学ぶことができた」のカテゴリーに含まれる文が、すべての実施年においてみられたこと、「みんなで大家族になれた」のカテゴリーに含まれる文が、4回の実施年においてみられたことから、これらのキャンプの目的⑤にあげた、他の家族と集団生活を送るなかで子どもたちを見まもり育てる雰囲気醸成されつつあったことがうかがえる。

一方、「いのちや生きる営みの大切さを感じた」

と「自然とふれ合う大切さを感じた」のカテゴリーに含まれる回答については、すべての実施年にはみられなかった。これについては、海遊びの際に、磯で生きものと触れあう時間をたっぷり確保できたか否かによるものであると考えられる。

2. 家族の今後の日常生活（生きかた）に活かしていきたいことがら

表4に示すように、「子どもを少し離れた距離から見まもりたい」と「子どもにできる役割を任せたい」のカテゴリーに含まれる文は、2009年を除く実施年においてみられた。山下ほか(2010)は、子ども時代の両親の養育態度が、子どもが大学生となった現在の親子関係や自尊感情、生き方志向にどのような影響を与えているのかについて考察している。これによると、「高い自尊感情を育てるためには、愛情や共感だけではなく、過保護にならず自律を促進する養育態度が重要である」こと、「過保護が積極的な生き方志向を持つことにネガティブな影響を与える可能性」が示唆されている。親子キャンプの生活体験が、子どもに対する過保護、過干渉にあった自分をふり返り、子どもの挑戦を見まもり、自律を支援する子育てに変えていくきっかけになるのではないだろうか。

「今後の生活でも家族以外の他者と協働できる機会をつくりたい」と「異なる年齢の家族以外の他者と接する機会をつくりたい」については、それぞれのカテゴリーに含まれる文が7回のうち5回の実施年についてみられた。高齢者と子どもの交流モデルを設定し、高齢者との会話の多様性が子どもの共感性を高めることを明らかにした村山(2009)の研究にも裏付けられるように、家族以外の他者、あるいは異なる年齢の他者と子どもとの交流を望む親の想いは、子どもの共感性を育むための礎になると考えられる。

子どもたちが承認を得るために、親から受ける期待とその達成度（承認の程度）について小学校4年生から6年生を対象とする質問紙調査を行った中井(2007)が「家庭ではわが子を肯定した上で、その良さを認めることで、わが子のプライドに火をつけることが不可欠である」と述べており、親が今後の日常生活に「子どもにポジティブ

フィードバックを心がけたい」と考えていることは、子どもの自尊感情を高める効果が期待できる。

また「子どもと関わる時間や機会を増やしたい」、あるいは「ゆっくりとした時間を過ごしていきたい」という親の意識は、子どもにさまざまな体験を促すための基盤として欠かせないものである。

「親子キャンプで得たつながりを糧に、子育てをがんばっていききたい」、「他の家族の子どもの成長にも関わっていききたい」というカテゴリーが抽出されたことは、親子キャンプの目的⑤、すなわち、大人みんなで子どもを見まもり育てる雰囲気が醸成されているものと考えられる。さらに、「子どもの発達には、子どもを取り巻く環境が相互に影響し合っているとすれば、子育ての責任を家庭だけに押し付けず、社会全体で子どもを育てる必要があると考えられる」と佐々木(2010)が述べているように、家族を超えた世代間交流を促す貴重な機会として、また、大人皆で子どもたちを見まもり育てるコミュニティづくりの方策として、親子キャンプに期待される役割は大きいと考えられる。

3. 親子キャンプ前後の養育スキル尺度得点の差について

本研究では、養育スキル尺度の「感情的叱責」については、キャンプ前に比べてキャンプ後の得点が有意に低下していることがわかった。「子育て不安感」「子育て負担感」は、子どもに対して感情的に叱るなどの行為と関連することが理解された」という中山ほか(2014)の研究結果から、親子キャンプの効果として、子育て不安感や子育て負担感の軽減が示唆される。さらに、「子どもの攻撃的行動を低減するためには「感情的叱責」を減らすことが有効である」という三鈺(2009)の研究結果は、親子キャンプの効果として期待できる親の行動変容によって、子どもの攻撃的行動の低減に寄与できると考えられる。

なお、本研究では、養育スキル尺度の「感情的叱責」以外の下位尺度については、キャンプ前とキャンプ後の得点に有意な差が認められなかった。これは、個々の母親が自分の子どもと向き合う、日常の子育ての場面とは異なり、親子キャン

プでは、キャンプ期間中のすべての時間を家族以外の子どもや大人と共有する生活を体験したことも影響していると考えられる。

V 結 論

本研究は、親子キャンプによって、大人皆で子どもを見まもり育てる雰囲気を醸成することができたのか、さらに、これらが子育て支援に関してどのような貢献を果たすことができたのか、について明らかにすることを目的とした。本研究の結果は以下の通りである。

2009年から2015年の毎年8月に実施した親子キャンプの参加者から得た、発見や気づきに関する回答文158を整理した結果、13のカテゴリーに分類することができた。生活体験が共有できる親子キャンプにおいて、参加者が大家族のように暮らす生活を体験することによって、子育てに関する家族を超えた助け合いが醸成されていくものと期待できる。

さらに、親子キャンプで体験したことを家族の日常生活(生きかた)にどのように活かしていきたいと思うか、に関する回答文84を整理した結果、13のカテゴリーに分類することができた。特に、家族を超えた世代間交流を促す貴重な機会として、また、大人皆で子どもたちを見まもり育てるコミュニティづくりの方策として、親子キャンプに期待される役割は大きいと考えられる。

一方、2015年の親子キャンプで測定した養育スキル尺度の「感情的叱責」については、キャンプ前に比べてキャンプ後の得点が有意に低下していることがわかった。親子キャンプの効果として期待できる親の行動変容によって、子どもの攻撃的行動の低減に寄与できると考えられる。

VI 本研究の限界と今後の課題

本研究で対象とした親子キャンプは、7年にわたって実施されたものであり、それぞれのキャンプに参加した家族数や年齢構成が異なっている。また、親子キャンプの効果を検証するにあたって対照群を設定していないこと、キャンプ前後の比較を行っているのが1回のキャンプのみで、しか

も回答者数が9名と少ないことは、この研究結果を一般化するには限界があると考えられる。

さらに、子育てに関する発見や気づきと、家族の今後の日常生活（生きかた）に活かしていきたいことがらについて、本研究で整理したカテゴリーの中には、このキャンプに参加するまでの子育ての過程で生まれた問題意識を基盤として成立しているものがあると考えられる。そこで、このキャンプ参加前から母親が抱えている子育てに関する問題意識と、キャンプで得た発見や気づきなどについての因果関係を今後の研究で明らかにしたい。

文 献

- NPO 法人子育て学協会 (2014) 幼児期の子育てに関する悩み調査, <http://kosodategaku.jp/wp-content/uploads/2016/07/enquete.pdf> (参照日: 2018年2月17日)
- 上野恵子, 穴田和子, 浅生慶子, 内藤 圭, 竹中真輝 (2010) 文献の動向から見た育児不安の時代的変遷, 西南女学院大学紀要, 14, 185-195
- 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング (2014) 子育て支援策等に関する調査 2014 報告書概要, http://www.murc.jp/publicity/press_release/press_141208.pdf (参照日: 2018年2月17日)
- 日本労働組合総連合会 (2013) 子ども・子育てに関する調査, <http://www.jtuc-rengo.or.jp/news/chousa/data/20130621.pdf> (参照日: 2018年2月17日)
- 三鈴泰代 (2008) 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究—親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連—, 発達研究, 22, 181-190
- 三鈴泰代 (2009) 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究—親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連—, 発達研究, 23, 57-72
- 朴 信永, 杉村伸一郎 (2009) 幼児を育てている親の子育てに関する省察の3層モデルの検討, 発達心理学研究, 20 (2), 99-111
- 山下美実子, 石曉 玲, 桂田恵美子 (2010) 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関係—過保護という養育態度の検討—, 臨床教育心理学研究, 36, 21-26
- 村山 陽 (2009) 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響, 社会心理学研究, 25 (1), 1-10
- 中井孝章 (2007) 子どもの自己承認欲求と親からの期

待と承認の関連性—ポストヒューマニズムの立場からの子ども研究—, 生活科学研究誌, 6, 113-137

佐々木尚之 (2010) 日本人の子育て観—JGSS-2008 データに見る社会の育児能力に対する評価—, 日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集, 10, 35-47

中山智哉, 渡邊 望, 春高裕美, 木山徹哉 (2014) 母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討—母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連—, 九州女子大学紀要, 50 (2), 15-29

(受付: 2018年7月24日, 受理: 2018年12月25日)

菊田 文夫 (きくた ふみお)

現職: 聖路加国際大学大学院看護学研究科基盤領域 (健康教育) 准教授

東京大学大学院教育学研究科修士課程 (健康教育学)・神戸大学大学院総合人間科学研究科後期課程 (人間形成科学)。博士 (学術)。

大妻女子大学人間生活科学研究所助手を経て、現職。専門は、健康教育学。

人間として生きる「生きかたの教育」に関する研究や教育、実践活動に取り組んでいます。特に、さまざまな価値観を有する大人みんなで子どもたちを見まもり、育てるコミュニティづくりが急務であると考え、豊かな自然の恵みを活かした「森のようちえん」の実践的研究を進めています。もともと趣味のひとつだったアウトドアの思想を、いまの仕事に活かせることが至上の喜びです。

主な著書・論文: 「みらいへの教科書」(単著, 学研教育みらい, 2015), 「幼児の運動介入プログラムのあり方をめぐって〜けがを恐れず、たくましく育つために〜」(共著, 子どもと発達発達, 16 (2) 121-125, 2018), 「自然体験活動を通して幼児の発達を支援する「森のようちえん」指導者の資質について」(単著, いのちの教育, 3 (1) 7-15, 2018), 「小学生の自尊感情を育むいのちの授業」(共著, いのちの教育, 1 (1) 2-9, 2016) ほか。